

平城宮東院地区西北部の調査（平城第469次）

平城宮の東院地区には、皇太子の居所である東宮や天皇の宮殿がおかれ、奈良時代を通して儀式や饗宴に利用されていたことが知られています。

東院地区では、これまで南半部を中心として発掘調査を進めており、復元整備された東院庭園をはじめとして、多くの掘立柱建物群が見つかっています。

今回の調査地点は東院地区の中でも北西に位置します。この南方に位置する昨年度調査区（平城第446次）では、東院中枢部へつながると考えられる東西通路が確認され、これをはさんで南北に建物群が広がっていることがわかりました。特に通路の南側では大規模な総柱建物群が検出しており、今回の調査では、通路北側における建物群の構造を知ることを目的としています。調査面積は850㎡で、調査は2010年4月1日に開始し、現在も継続中です。

今回の調査で見つかったのは、掘立柱建物8棟、掘立柱塀12条、溝5条です。これらは周辺の調査の成果に基づくと6期以上に区分できます。このうち注目されるのは、調査区中央部の東西塀とその両隣を走る幅約1mの2条の溝です。東西塀は、奈良時代を通して何度も建て替えられながら機能していたようです。また、2条の溝のうち北側のものは、石組をもっており、改修されつつ利用されていたと考

えられます。この2条の溝からは、土器や瓦などの多量の遺物が出土しました。この調査区中央部の塀と溝を境界として、南北に各時期にわたって建物群が配置されています。ただし、この中央の区画（塀と溝）を境として、その南北では建物群の規模が異なっています。南側では、柱間の距離や柱穴の大きさから大規模な建物と推定されるものが多く、北側には小規模なものが多いのです。この中央の区画を境界とする南北の違いは、遺物の出土状況や内容にも表れていて、北側は南側よりも出土量が多い傾向があり、食器類や大甕が目立ちます。このことから、区画北側でこれらを保管あるいは使用していた可能性が考えられます。

こうした状況は、今回の調査区より南方にある大規模な総柱建物群が並ぶ空間では認められません。したがって、これらの空間とは性格が異なり、今回の調査区付近が東院地区での人々の生活を支えたバックヤードとしての機能を備えた空間であったと考えられます。

今後も東院地区の調査は継続されますが、今回これまでと性格が異なる空間が見えてきたことで、東院の様子がより明らかになることが期待されます。

（都城発掘調査部 芝 康次郎・桑田 訓也）



平城第469次調査区全景写真（東から）